

## I 日本人と留学生の相互理解の過程 ——ホームステイの事例に基づいて

ジェーン・バクニック  
メディア教育開発センター

### はじめに — 留学生教育プログラムの存在理由

日本は社会、外交、政治等の国際的に重要な場面で、その経済力に見合った役割を果たしていないという海外の評価をよく耳にする。日本において国際化の重要性が叫ばれて久しいが、その具体的方途については、未だ模索の段階にあるようである。

国際化の基本は、人間対人間のコミュニケーションである。日本人はビジネス面では世界の隅々まで活躍の場を広げ、その能力を発揮しているが、外国人との個人的コミュニケーションとなると苦手だと思う人が多い。また、諸外国の人々からは、日本は大国の中で最も未知の理解しにくい国の一つとみられている。日本人と外国人双方がお互いに理解しあえないと考えている限り、両者間のコミュニケーションの障壁は解消されないだろう。

高等教育における留学生のための教育プログラムは、次世代の若者がこのようなコミュニケーションの障壁を乗り越え、真の国際化を促進する上で有効な方法の一つである。このプログラムによって留学生にいかにか充実した学習環境と実りある日本の生活を提供しうるかが、日本の国際化にとって重要な鍵といえる。

文部省は、日本の大学に学ぶ留学生の受け入れを大幅に増加させることを目的に、1983年以降、高等教育における留学生のための教育プログラムを積極的に促進してきた。<sup>1</sup>しかしながら、国際化は単に留学生の増加によっては達成されない。現在、留学生は世界的に増加しているが、留学体験がかならずしも、その国を真に理解し、互いの友情と尊敬の念を深める結果にはつながらない。留学生の中には、留学先の人々と人間的交流を築くことが出来ずに失望するケースも多々ある。日本の留学生のための教育プログラムを終えた学生たちが、自国に戻り、将来にわたって実りある人間関係と相互理解を築くことこそが、日本の国際化の実現にとっても重要不可欠なことである。

### NIME プロジェクトの目的と特徴

メディア教育開発センターは、国立大学共同利用機関として昭和53年10月に設立され、現在は大学共同利用機関として改められている。現在、同センターでは、留学生を対象とする教授方法や教授内容をまとめ、新しい教材を開発するとともに、メディアを利用してそれを広範囲に伝達する方法の研究を行っている。また、1995年に文部省の決定した短期留学推進制度の方針を受けて、外国人留学生のために「高等教育における留学生プログラムの研究開発」というプロジェクトを開始した。

本プロジェクトは、①国際化を実現させるための教材開発（長期ホームステイの事例を取り上げた印刷教材*Shifting Worlds: Outside and Inside Perspectives on a Japanese Homestay*（英語版）<sup>2</sup>、『日本のホームステイにおけるウチとソト』（日本語版））、②インターネットによ

る教材の提供（上記印刷教材を基にしたインターネット上の教材を現在開発中）を行っている。

また、異文化理解に関する専門家及び、現場で実際に留学生を指導する教官等を構成員とした研究会を開催し、留学生及び日本人がいかに相互理解を深めていくかを研究し実践している。特に留学生に対しては、日本社会の理解をより深めるために、教科書や書物から学ぶだけではなく、日本での生活体験を最大限に活用し、日々の具体的な経験から日本を学び、相互理解を深められるように配慮している。

研究目的である留学生及び日本人の相互理解というテーマには、私自身がかつて留学生として培った経験が大きな影響を与えている。私は大学卒業後、留学生として日本を訪れたが、来日直後は日本社会に入り込む糸口すら見つけられなかった。

しかしながら、学校の斡旋で、長野県にホームステイに行くことになり、このホームステイが私の人生に大きな影響を与えることになった。この時初めて周りの人々と人間関係が徐々に作られていった。それによって、日本の社会が少し開かれたように見えた。ホストファミリーはとても親切だったが、私はだんだんと知らないまま壁にぶつかるようになり、ホストファミリーとの関係がおかしくなっていった。壁を乗り越えるのに、お互いに変な努力が必要だったが、その乗り越えた過程も大事な勉強になった。少しずついろいろなことが分かりはじめ、家族の一員としての役割をお互いに作り、「ソト」から「ウチ」へとだんだん入っていくようになった。ホームステイを体験した1年の間に実際に日本社会に触れ、文化人類学に関心を持つようになった。大学院在学中に研究調査のため度々日本に戻ったが、その度に同じ家に滞在し、博士号取得までの10年間のうち延べ5年間にわたり、ホームステイを続けた。その間にも、私は「ソト」から「ウチ」へと入り込み、家族と親しい関係を築き上げることができた。

断続的ではあるが5年間という長期にわたるホームステイを最終的に終えた時、私自身が体験した問題や変化は、日本社会の基本的な組織構造を理解するための重要な手がかりとなるのではないかと認識した。留学生が私と同じ様に長期ホームステイで経験するであろう過程は、日本社会の枠組みを説明する基本的なモデルとして用いることができることに気付いたのだ。その後15年間、私は米国と日本の大学で、日本への留学予定者、日本に滞在中の留学生、留学の予定はないものの日本社会に関心がある学生を教えてきた。現在はメディア教育開発センターにおいて、過去の経験に基づいた研究を行い、先に挙げたプロジェクトを推進している。<sup>3</sup>

## 研究内容

本プロジェクトは、留学生に日本の人間社会を紹介するための新しい学習課程の構築を目的の一つにしている。効果的な異文化学習のモデルとして、長期ホームステイを取り上げている。研究の内容は、国内の異文化経験から説明できる。外国に行かなくても、自分が住んでいるところから引っ越せば、知らないことが多々出てくる。これは、論理的なことではなくて、社会的、心理的、生理的に不安なことである。まず第一に、周りの環境がわからない。道に迷うし、近所ではどこで安くいい買い物ができるかわからない、などいろいろな面で不安が生じる。新しい学校や社会に入る場合は、周りに知り合いがいらないなど初期的な対応がまだうまく確立していないので不安である。<sup>4</sup>

しかし、外国に行く場合は、こういった不安に加えて人間関係の作り方などの社会的背景までもが全くわからないので大変である。この状態を表した諺がいくつかある。日本語では「陸に上がった河童」(不得意なところ(違う場所)にいる、その人にあった場所ではなく困っている)や、英語では“*He/ She's like a fish out of water.*”(全然違うところに迷い込んでしまった)等があり、これらはそういう状態を表現している。これらの諺は、留学生の状態を非常にうまく言い当てている。

日本語には「地に足がついている／いない」、英語には“*To have one's feet on the ground. / Not to have one's feet on the ground.*”という言い方がある。このような表現の意味をもっと深く捉えてみると、空中に浮かんでいて大地に根を下ろしていない状態、浮遊感覚状態、つまり、人間が周りの環境と結び付いていない状態を表わしていることがわかる。初めて来日した留学生が置かれる状況は、まさに周りの環境と結び付いていない状態であることが多い。

異文化社会の学習過程において、留学生は社会における「ウチ／ソト」という概念にぶつかることになる。この「ウチ／ソト」という概念は、日本に来る外国人にとっても、外国に行く日本人にとっても、「ウチ」と「ソト」は抽象的概念ではなく、日常の経験に根差すものである。「ウチ／ソト」は、言語的にも、文化的にも、社会的にも、日本の社会を理解するための基礎となる根本的な区別である。長期のホームステイをする留学生は、私自身がホームステイで経験した「ソト」から「ウチ」への緩やかな移行を体験することにより、言語的、社会的能力を次第に身につけていくことができる。留学生は徐々に周りの状況を理解できるようになる。そして、理解するにつれて、「地に足をつける」、つまり、自分の周りの環境に自分を結び付けることができる。このようなことから、長期のホームステイは、異文化交流の学習過程の事例として適切であるといえる。

### ホームステイのハネムーン期間

欧米からの留学生の事例に注目すると、ホームステイ開始時には「特別のお客様」として、受け入れ家庭からたいへん親切にされる留学生が多い。受け入れ家庭の多くは、留学生を「お客様」として家庭に迎え、特別の配慮をする。例えば、客間を留学生の自室として使わせたり、ステレオ、エアコンなど、その家庭の子供の部屋にすらないようなものを特別に用意したりすることもある。留学生のために普段は作らないような食事を作り、週末には旅行に連れ出したりと留学生が喜ぶように様々なサービスをする。受け入れ家庭は、留学生を気遣い、素晴らしい時間と環境を提供する。その一方で、留学生にその努力を察してもらい、感謝されることを無意識に望んでもいる。このような配慮は、ホームステイ初期の段階では大切なことであるが、長期ホームステイの場合、長くこういった状態が続くと異文化交流の妨げとなることもある。

受け入れ家庭は、留学生を自分たちの生活の中心に据え、無理をしつつもごく自然に振るまうので、留学生にとってそのような家族の努力や負担をうかがい知ることは非常に難しい。自分のいる状況が日常とはかけ離れていることに気付くことすらできないかもしれない。留学生が日本での生活は素晴らしい、日本は居心地のいい社会だと誤解してしまうのも仕方がないことともいえる。留学生にとって、ホームステイ初期は何もかも目新しくて素晴らしい、まるで夢のような期間(ハネムーン期間)であろう。そして、この状態を当然だと受け止め、ホームステ

イ期間中はこの状態がずっと継続していくものと錯覚してしまう。

留学生の認識とは裏腹に、快適な日々が続くハネムーン期間は、日本の一般家庭の自然な姿では決してなく、家族の留学生に対する優しさや思いやりから作り出されている。実際、留学生が快適であればあるほど、家族が無理をしていたり、負担を感じていたりする可能性は高いはずである。さらに、受け入れ家庭と留学生の認識が大きく異なっているうえに、双方がその認識の違いに全く気付いていないため、表面的に素晴らしいハネムーン期間は内面的な危険を秘めている。そのために、ホームステイが長期にわたるにつれて、その認識のズレが様々なかたちで問題となり、関係に支障が生じてくるようになる。

### 留学生と受け入れ家庭——相互理解のプロセス

留学生とホストファミリーとの関係は、時間とともに段階的变化を遂げていくが、具体的には、3つの段階に分類できる。まず、ホームステイ開始時には、双方が互いの生活にあまり干渉せず、希薄な関係でつながっている段階である。この段階では、特に問題も起こらず、表面的にうまく行っている様相を呈している。上述の「ハネムーン期間」は、この段階に分類される。

#### 事例1 トム（アメリカ人男子学生）から見た日本のホームステイ

Things are going just dandy with my host family. They are very nice, provide me with just about anything I need (and often more), and pretty much just leave me to do my own thing.

The meals are great, and my only complaint could be that they feed me too much. My room is nice and I am perfectly free to come and go as I please. I don't really see them or interact with them a whole a lot, but I understand they are busy and have their own things to do and they understand the same about me. I am basically still a guest, although I guess I am becoming "friends" with them. I like the situation. It's comfortable, without being too deep.

#### 事例2 日本人家庭（田中）から見たマイク（アメリカ人男子学生）

私がアメリカへの留学を翌年に予定していた時、わが家でホスト・ブラザーを受け入れた。自分と同じ制度を利用して来日した留学生に、アメリカの学生生活について聞いたり、英語や日本語で話せる機会が増えればと私が希望したからである。外国に対してほとんど興味のなかった母親がホームステイに賛同したのは、わが家がもともと2階に下宿人をおいていたことがまずあるが、ホームステイ・プログラムが大学主体のものであり、受け入れ家庭と留学生の仲介として大学が深く関与していたことが安心だったようだ。

こうして始まった一年間のホームステイは、特に問題もなければ、ホスト・ブラザーと家族以上に親しくなるということもない、非常に表面的なものであった。私たちの関係は、下宿人—大家の関係と家族の関係のちょうど中間位の関係だったように思う。私とホスト・ブラザーは、共通の友人と集まってでかけることはあったが、お互いの生活にあまり深く関与はしなかった。

一般に「ハネムーン期間」と称される期間もなかった。到着日こそ、家族全員で歓迎パーティ

ィをしたものの、次の日から特別なことはしなかった。私も、大学や近所を案内したり、友人を紹介したりはしたものの、その他に特に彼のために何かしたという記憶もない。彼も、同時期に留学してきた友人と自由に「東京探索」に出かけたりしていた。

ホスト・ブラザーには2階の一室を使ってもらっていた。2階には他の下宿人と兄の部屋、客間を兼ねた居間があり、トイレと洗面所もあった。彼の部屋には特にTV等はおいていなかったが、彼は2階の客間に自由に出入りしてTVを見たり、ファミコン・ゲームをしていた。ダイニング、母、私の部屋は一階にあった。

家族がそれぞれ、仕事なり、アルバイトをしていたため、わが家では、家族全員が揃って食事をするのは、珍しいことであった。朝食は、母が準備してくれるものを、それぞれが自分の出かける時間に合わせて食べてでかけた。夕食こそ、家族が揃う可能性は比較的高いものの、日曜日、または特別の機会を除けば、全員が揃うことはめったになかった。ホスト・ブラザーが滞在中も、母または私が彼と食事をするか、3人で食事をするが多かった。朝と同様、準備しておいたものをそれぞれが帰宅した時に食べたこともあったように思う。

食事の際にはよく話したが、お互いに言語能力がなかったため、深い会話はできなかった。母は英語はほとんどわからない。私の英語も四苦八苦して出てくる程度。兄は高校の教科書レベル。ホスト・ブラザーの日本語は、来日当初は挨拶ができる程度だった。しかし、大学の授業内容、家族、日本のしきたりなどについて、夕食時、そしてその後もダイニングで話すことはあった。ホスト・ブラザーは、特に母と話したことにより、日本語の練習になったと言っていた。

一年間のホームステイは、私たちもホスト・ブラザーも生活パターンを特に変えることもなく、つつがなく終了した。ホスト・ブラザーが帰国した際に、私がアメリカに留学し、クリスマスには彼の家に滞在させてもらった。しかし、それ以後はお互いに連絡を取っていない。

この段階（第1段階）は、ホストファミリーと留学生が、それぞれの生活習慣を保ったまま、同居している状態である。互いの生活空間にあまり出入りしないために、コミュニケーションは必要最小限に保たれ、意見の衝突も起こらない。留学生も、家族から束縛されないため、不自由を感じることもない。互いの生活が乱れることがなく、双方共に、「パーフェクトな関係」を築いているような認識がある。しかし、実際には、彼等の人間関係は表面的なつながりに過ぎず、ホームステイ終了と共に関係が途絶えるのが通常である。

しかし、時が過ぎるにつけ、接触機会が増えると、次の段階（第2段階）に入り、家族と留学生の交流が頻繁になると、様々な形で問題も生じてくる。滞在期間がある時期を過ぎると、留学生とホストファミリーの関係は平和で、楽しいだけではなくなる。特に、ホストファミリーが留学生を中心に生活する「ハネムーン期間」を演出していた場合には、いつまでもその状態を継続することは無理を感じ、疑問や不満が現われてくるようになる。留学生としても、当然だと思っていた状況に変化が現われ、対応に戸惑うようになる。

### 事例3 カトリーナ（フィンランド人女子学生）

I did a homestay at my friend's home in Chiba during autumn break. Before going there I

was a little bit excited but I thought it should not be a problem to adapt to his family for a couple of weeks and become a part of it since I had already experienced two long-term homestays before this one. However, when I was lying on my futon on the first night of my stay I was really quite confused and wondered how I could manage the next fourteen days without disturbing the relationship with my friend and his family.

We arrived in Chiba in the early evening and the mother Tomoko came to pick Hiroshi and me up from the station. Her husband had not yet returned from work so we had some time to relax and organize things before dinner. Tomoko showed me where I could leave my luggage and apologized many times about the *tatami* room I would be using as a bedroom because it was part of the living room in the daytime. Even though we had discussed this on the phone she seemed to be extremely concerned about the inconvenience it could cause me since there was no private room for me.

Since it was autumn she also asked many times if I was cold and gave me a gown to wear during my stay. There was also a gown hanging in the corner of the *tatami* room and she asked me to try it on to see if it would be my size. Needless to say it was a little too tight and Tomoko suggested that she would go upstairs to look for something else instead. It was only after I had told her several times that both the room and the gown were perfect that she finally believed me.

Since it was evening she started to prepare the meal even though it was obvious that she had prepared most of the food beforehand. While she was carrying the food to the table I sensed there was an invisible wall between me and the people I was visiting on that night, and there was no social space for me to take part in tasks like setting a table or washing the dishes that family members would do and thus overcome the wall. Since I felt quite awkward about my position as a guest when the purpose of my visit was to do a homestay I discussed it with Tomoko next morning and asked her not to treat me as a visitor. Hiroshi also supported me by telling his experiences while in England in order to assure her that it was perfectly suitable to treat me less formally.

Later during the day we cleaned the house together and I helped her to do the dishes after lunch. My help was also welcomed while preparing dinner and I felt relieved since I started to feel more comfortable and not so separated from the family like the night before. While dining I also noticed they had added *-chan* to my name instead of the previously used *-san*.

After the first week Tomoko did not hesitate to ask me for help at all and I found myself in the kitchen more and more often before lunch and dinner. We also did shopping together and since we were both interested in cooking I spent some afternoons teaching her how to make Finnish bread, buns and casseroles. During those two weeks there was plenty of food, cakes and biscuits offered. However, the amount of food gradually decreased to the end of my stay and when I visited the family at Christmas there was a clear difference in the amount of food offered.

カトリーナは、「お客様」としての立場ではなく、家族をもっと積極的に手伝える立場になる必要を感じていた。受け入れ家庭のカトリーナへの対応は柔軟だった。母親は、カトリーナの居心地の悪さを察知し、彼女の希望を受け入れた。息子も、イギリスで自分が体験したホームステイを説明し、カトリーナの意見を支持した。しかし、カトリーナの滞在期間は短かったため、母親の観点から、家庭内での役割分担をさらに調整していくには、時間的に不十分だった。

次の事例は、役割の変化が続いていった長期滞在の例である。

#### 事例4 エリーズ（ドイツ人女子学生）

Two years ago I stayed with Family “G”. On a private initiative I was taken into this family. They did not want to take any money from me. From this family I received the same kind of support one usually receives from their own family. I really felt like a family member. The mother taught psychology at a university in Kobe, the father was a lawyer, two boys were then in senior high school, and the oldest son recently entered the university.

When I first came I received a lot of deference from all the family members, especially the mother. It was my first time in Japan and I was shy. Later the family told me that this had an impact on their behavior. I was always served tea and of course the meals. Even when I was studying in my room the mother came and brought me fruits or tea. I also could not speak Japanese, therefore I was not able to join family discussions. The family members had to talk to me specially in English.

But after I offered to help in household chores I got more and more involved in the family life. I took the same duties in the household as the two boys, and pretty soon things shifted so that I no longer took the first turn in the bath; the parents did. Gradually, the mother stopped treating me specially as well. I no longer had a special role in the family and got more involved in the family matters. Nevertheless the mother was good in detecting my feelings and took time to talk to me at the times I felt sad.

In this family all the family members experience the same sort of attention. All the family members seem to be relaxed. And all seem to contribute to the well-being of the family through fulfilling their tasks. The mother is not the only one who is doing things for others, or cooking or serving. Usually all the persons available will put a hand in.

But I was also expected to notice when there was something to do in the household, or when it was necessary to do something for others. I got involved in the cycle of giving and receiving. In that family a person who was tired, ill or in a stressful situation would get deference from the others, especially from the mother. It was never tension-related for me, since I was never the only person receiving deference. The mother had more responsibility, and usually did things for others, even when she was tired after work. But she also received deference (meaning people did things for her) when she showed her tiredness. Then the boys would try to do their tasks more diligently, so that things went smoothly. The father would also

do things for her, as I would also, such as helping with the washing or cooking a German dinner or just doing additional things to spoil her a little.

All in all, I felt like in this family I was treated as a family member.

### ホームステイの成否

ホームステイの成否は、問題が生じてきた時にどう対処するかにかかっているといっても過言ではない。問題が表面化した時に、自己を抑え、我慢してしまうと、かえって関係が悪化し、最悪の場合、双方にとってホームステイは嫌な思い出として終わってしまう。問題があることをお互いに認識し、一つ一つの問題について話し合う姿勢が大切である。

実際問題として、ホームステイ期間が長期の場合、問題の表面化は、むしろ好都合である。バックグラウンドが異なる留学生と受け入れ家庭がともに生活をしている場合、コミュニケーションはなかなか成立しない。しかし、解決しなくてはいけない問題と直面することによって、コミュニケーションをとる必要に駆られる。ホームステイを開始して間もない時期に起こる問題の一つとして、家族が留学生を子供のように扱うことが挙げられる。留学生は、異文化にいたるため、文化的・社会的な側面で、同年代の日本人同様、一人で行動できる訳ではなく、その意味で、子供のようなものである。しかし、自国では充分、社会的に機能してきた留学生としては、子供として扱われることに苦痛を覚える。家族の留学生に対する認識と、留学生自身の認識にはズレがあり、これが問題となることが多いが、内面的な問題なので、解決するのは、非常に大変である。カトレーナとエリーズの事例では、この認識転換が行われ始めた段階が描写されている。しかし、次のスティーブンの例では、認識転換が充分になされた状態が変化の過程とともにまとめられている。

### 事例5 スティーブン（アメリカ人男子学生）

My first impressions of my family were fine; they were very concerned and tried hard to make me comfortable. But as time went by I became worried that we would never get past the point where we seemed stuck: of them treating me like a child who had to be watched over. I felt hemmed in by my curfew, and felt we couldn't communicate, even though I had had enough experience in Japanese that I could speak to and understand them—at least adequately.

I had already been in Japan two times before, and had had a homestay with a family in Nagoya, which was really good: the family had a huge house and treated me really well! Inevitably, I guess, I couldn't help comparing the two families, and my present family didn't come off as well.

In our class on the Japanese Family we began to have assignments about our homestay families, and for one assignment, I was supposed to ask my family if they could explain their genealogy to me (this was after we had studied genealogies in class). This ended up provoking some interesting conversations with my Japanese family about my American family. This was the beginning of a lot of conversations, which began over class assignments, but then continued to all kinds of subjects, and went way beyond the assignments.



There was also a major turning-point with my family, which happened through the counselors, (student teaching assistants in the Japanese language classes) about half-way through the semester. I was really upset about being treated like a child and finally went to Tetsuo and Fumiko (the counselors) about it. They came up with a plan to change the family's image of me, which went like this: first, I was supposed to put on a dinner party, with all the preparations including the cooking and cleaning up to be done totally by me. The family were supposed to be complete guests. I explained this to the family, and they went along. I invited the counselors to the party as my friends. So I got a whole dinner together, made hamburgers with stuffing, and baked potatoes, salad, desert—the works. The family went along with this whole thing, and throughout the meal the councilors kept telling all these stories—about my being in the honor class, editor of the high school paper, lettering in soccer, an Eagle Scout, etc.—they really laid it on. I had no idea how the family was taking this, but as I was clearing up the dishes, amazingly, after the dinner, the *otoosan* suddenly threw me the car keys and said I should drive my friends back to the train station. I was really afraid—but after all that build-up, I had to keep acting “mature” so I got in the car and somehow managed to drive them to the train station.

After this, things changed dramatically. My curfew ended. My cooking became a standard feature in family events—I tried out every dish I knew (and then some). It also became standard for me to pick up my host brother and sister at the train station, when they arrived late. Being able to have a role and duties in the family made me feel much more comfortable. And throughout this time, our discussions continued. I had been planning to stay on after the semester ended and trying to get a business internship with a Japanese company. During the last month, my family invited me to stay on with them, and I feel they truly meant they wanted me—so I accepted.

In finally being able to explain to my family all of my confused feelings about my Japanese background, “identity,” thought process (Japanese-American), and other questions, my host family has started to help me out. In doing so, they (the parents) have enjoyed learning how interesting their culture really is in the world and its good and negative aspects. They have also learned to truly appreciate my upbringing—thinking of ideas of how to raise their children to be a little more “worldly.”

It's difficult to explain in a couple paragraphs; however, I can honestly say that I am becoming a close friend with my host parents. Our conversations have been getting deeper, more personal, and sometimes emotional. The net effect has been an incredible bridging of cultures. Before coming here, my family (in the States) went through a lot of turmoil for various reasons. Well, during that time, I really learned the value of my family and we all became closer. However, just as I came upon this realization, I had to come to Japan. So, after sharing with my host family my “re-awakening” into the value of family, they seem to have reached out to really be my family in Japan, not just a “host” family.

## 真の異文化理解に向けて

話し合うことによりお互いを理解し、問題解決につなげてこそ、ホームステイは有意義な経験となるだろう。また、そうしてこそ、ホームステイの本来の目的である国際交流の始まりともなろう。特に、事例5は、留学生が家族に感じていた不満を、日本人学生の協力を得て解決した例である。問題解決の結果、家族の留学生に対する認識は変化し、留学生は家族の一員として、生活に自然な形で溶け込んでいった。ホームステイ期間を過ぎても、関係は継続し、真の意味での異文化交流が達成されたと言える。

いずれの場合にせよ、留学生とホストファミリーが、家庭内で留学生の役割を見つけられるかが鍵となる。ある意味では、役割を果たすことにより、留学生がその家庭に存在する意義、あるいは、正当な理由づけともなる。事例5のスティーブンは、料理をしたり、家族を駅まで自動車で送り迎えする役割を与えられ、その役割を果たしたことがきっかけで、家族の中に入っていくことができた。このように、受け入れ家庭と留学生の話し合いの中で、いかに、家族の一員としての留学生の役割を作り出すかが、結果的に、双方にとって実りの多いホームステイとなるかどうかを決定づける要因となる。「お客様」という「ソト」の立場から「家族の一員」という「ウチ」の立場に移行した留学生は、家族とのコミュニケーションも以前よりうまくとれるようになり、自分の周囲で起こっていることを深く理解できるようになる。日本社会で「地に足を付ける」ためには、この過程は不可避であるといえる。

異文化の中で「ソト」から「ウチ」に移行していく過程で起こる諸問題は、外国人留学生のみならず、日本で生活しようとする外国人（例えば、企業などでのインターンシップ）にも、起こりうることである。また、外国で生活を始める日本人も、同じ様に、周りの環境に結び付いていない状態（「地に足がついていない」状態）に遭遇する可能性が多々ある。彼らも、類似した過程をたどるため、留学生の状態を広い意味で理解することが重要である。留学生と受け入れ家族が、それぞれをお互いに適応させ、徐々に相互理解を深めていく過程は、一般的な異文化理解のモデルとして運用できる。また、グレゴリー・ベートソンが提示する学習段階とも密接な関係が見受けられる。

留学生と家族に見られた異文化相互理解モデルの特徴は、3つの段階を移行する点であろう。実際には、全てのホームステイにおいて、この段階的变化が起こるという訳ではなく、第1、第2段階に滞ったまま、ホームステイを終了する場合も多々ある。実際、この論文で取り上げた事例では、事例5のみが、最後の段階にまで到達した例である。

その他の事例は、各段階の特徴的状況を的確に捉えている。第1段階では、留学生と家族との関係は、弱く、物理的で、精神的な関係には発展していない。第2段階では、留学生に役割ができ、立場上は、家族を手伝い、家族生活に貢献できるメンバーとはなる。だが、留学生と家族が相互に理解したという状況とは言い難い。第3段階は、問題を問題として認識し、解決法を模索していく過程であり、これを乗り越え、相互の理解が深まり、関係が深まる段階である。具体的なプロセスとしては、認識の違いが原因で、問題が表面化する。そして、当事者同士が自分の「世界」を脱せず、それぞれの見方で状況を判断するため、相互の人間関係に支障が生じる。しかし、自分の見方に固執せず、自分を自文化に閉じ込める「壁」をそれぞれが乗り越えることができると、双方が共有できる新たな世界が確立されるのである。

## [ノート]

<sup>1</sup> 田浦宏己、文部省学術国際局留学生データ、1996年。1頁。『学園』(1996)、2-5頁。

<sup>2</sup> 拙著（近刊）に、部分的にだが掲載されている。

<sup>3</sup> 筆者自身が体験したホストファミリーとの関係における変化は、拙著（近刊）に詳細に記載されている。また、「ウチ」と「ソト」の特異性は、筆者とクインの共著（1994）の中で、日本社会を理解するための枠組みとしてまとめられている。

<sup>4</sup> 人類学、社会学では、暗黙の意味を持つ環境を理解する過程（「地に足がついている」という表現に要約される過程）は、異文化適応過程において非常に重要だと考えられている。この過程の基盤は、現象学の分野で、Evens（1995, 1996）によって説明されている。Garfinkel（1974）や McHugh（1968）に代表される社会学的、民族誌学的方法論者は、社会に明示された焦点を含めた現象的なアプローチを取っている。Evens が記すように、人類学では、この焦点は、広く信じられ、教えられており、Geertz（1973）や Giddens（1979）と同じように異なる焦点をもつ社会学者にとって大切である。なかでも、Bowen（1954）や Leenhardt（1979）に例証されているように、他者が持つ暗黙の意味を発見していく過程が民族学者にとっての重要な課題ではあるか、Bourdieu と Wacquant（1992）は、フィールドワーク実施にあたって、自身が異文化に対して持っている無意識の仮定を認識する必要性を指摘している。

<sup>5</sup> Bateson（1972）、279-308頁を参照。米国における外国人交換留学生が体験する3段階の学習過程は、Ogami 制作のビデオ・ドキュメンタリー“Cold Water”に示されている。Ogami の段階づけは、内容的には多少異なるが、プロセスは、本文の事例、特に事例5と共通点が見られる。

#### 参考文献 (英文)

- Bachnik, Jane M. Forthcoming. *Family, Self and Society in Contemporary Japan*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press
- Bachnik, Jane M. and Charles J. Quinn, Jr. 1994. *Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language*. Princeton: Princeton University Press.
- Bateson, Gregory. 1972. The logical categories of learning and communication. In *Steps to an Ecology of Mind*. New York: Ballentine Books. Pp.279-308.
- Bourdieu, Pierre and Loic J. D. Wacquant. 1992. *An Invitation to Reflexive Sociology*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Bowen, Elizabeth. 1954. *Return to Laughter*. New York: Dell Publishing Co.
- Evens, T. M. S. 1996. "Phenomenology" In *Encyclopedia of Philosophy*.  
\_\_\_\_\_. 1995. *Two Kinds of Rationality*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Garfinkel, Harold. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Geertz, Clifford. 1973. *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books, Inc.
- Giddens, Anthony. 1979. *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*. Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press.
- Leenhardt, Maurice. 1979. *Do Kamo* (Basia Miller Gulati, Trans). Chicago: Chicago University Press (Original 1947).
- McHugh, Peter. 1968. *Defining the Situation*. Indianapolis & New York: The Bobbs-Merrill Co., Inc.
- Ogami, Noriko (Producer). 1988. *Cold Water*. Yarmouth ME: Intercultural Press, Inc.

#### 参考文献 (和文)

- 田浦宏己 「日米交換留学振興にむけての日本政府のアプローチ」、文部省学術国際局データ、1996年。  
\_\_\_\_\_. 『学園』、1996年。